

今日は、私にとって特別な日だった。

巫女として神殿に仕えて三年。ようやく「聖水の儀」を任されることになった。

水神様に仕える巫女にとって、これは最も神聖な儀式だと聞いている。詳しい内容は当日まで教えてもらえなかったけれど、きっと厳かで、美しい儀式に違いない。——そう思っていた。

唯一の不安があるとすれば、担当の神官が誰になるか、ということだった。どうか、あの男にだけは当たりませんように。

神殿で最も苦手な男——ゼノ。

神官の中で最も不真面目で、最も敬虔さに欠ける男で、いつもへらへらしていて、修行もサボり、神殿の規律を何度も破っている問題児。

——それでいて誰も咎められないのは、神殿長の息子だからだ。

そんな男と初めて会った日のことを、今でも覚えている。私が水汲み

をしていると、ゼノが後ろから近づいてきて、耳元で囁いた。

『お前が新しく入った巫女？——ふうん、なるほどね』

値踏みするような視線が、頭のとっぺんからつま先までゆっくり降りていった。

『……なにか？』

『いや、別に。思ったより真面目そうだなんて』

そう言いながら、こちらの顔をじつと覗き込んでくる。近い。息がかかるほど近い。反射的に半歩退くと、男は目を細めて笑った。

『——やっぱり。男に慣れてないだろ、お前』

それ以来、ゼノは何かにつけて私に絡んでくる。『今日の巫女服、可愛いな』『お前が祈ってる姿、俺結構好かも』『なあ、俺のこと嫌いっばいけど、なんでそんなに意識してんの？』——全部、馬鹿にしてるとしか思えない。真面目に修行している私を、からかって楽しんでる。

だから、嫌いだ。大嫌い。

——そんな男が、よりによって今日の担当になるなんて。

「さあ、これを全部飲んで」

儀式の間に通される前に、年配の神官に大きな器を渡された。中には透明な水がなみなみと注がれている。

「これは……？」

「清めの水だよ。儀式の前に身体を内側から清めるんだ」

(……そういうもの?)

言われるままに、器に口をつけた。冷たい水が喉を通っていく。一口、二口——思ったより量が多い。お腹がたぷたぷしてきた。

「全部飲むんだよ。一滴も残さずに」

「は、はい……」

必死で飲み干した。お腹が重い。こんなに一気に水を飲んだのは初め

てだった。

「よし。では、儀式の間へ」

案内されるまま、神殿の奥へと進んでいく。大きな扉が開かれた。中は薄暗く、蝋燭の灯りだけが揺れている。中央に祭壇のようなものがあり、その周りを数人の神官が取り囲んでいた。

——そして、祭壇の前に立っている男を見て、私は凍りついた。

「よう。待ってたよ」

ゼノだった。

「……嘘でしょう」

（……最悪よ。初めての儀式がよりによって、この男なんて……）

「嘘じゃないよ。光栄に思えば？」

にやりと笑うゼノの顔を見て、なんだか嫌な予感がした。

「なぜあなたが担当なんですか。もっとふさわしい方がいるはずです」

「俺が志願したんだよ」

「……え？」

「お前の聖水の儀、俺がやりたいつて言ったんだ」
意味が分からなかった。なんでこの男が、わざわざ私の担当に志願するんだ。

「なんで……」

「さあ？なんでだろうな。——他の奴がやるよりマシだろ」

最後の一言だけ、いつもの軽い調子と何か違った。でも、考える暇もなく儀式は始まった。

「では、儀式を始めろ」

年配の神官の声が響いた。

「巫女様よ、祭壇の上に横におなりください」

「は、はい……」

言われるまま、祭壇の上に横たわった。石の台は冷たくて、背中がひやりとする。周りを神官たちが囲んでいる。その視線が、全部私に注がれている。

(……一体どんな儀式なのかしら？きっと神聖なものよね。なんだかドキドキしてきちゃった)

「――聖水の儀とは」

年配の神官が、厳かな声で語り始めた。

「巫女様の身体から聖なる水を引き出し、神に捧げる儀式である」

聖なる水？身体から引き出す？その説明だけではまったく意味が分からなかった。

「巫女様の身体には、水神様の恵みが宿っている。それを解放することで、我々は神の祝福を受けることができる」

「あの……具体的に、何を……」

「俺が教えてやるよ」

ゼノが、祭壇の横に立った。その手が、私の巫女装束の裾に触れた。

「な……っ」

「儀式だから。大人しくしてろ」

裾が、ゆっくりと持ち上げられていく。太ももが露わになる。そして

「な、何を……っ！」

「聖水の儀ってのはな」

ゼノが、私の脚の間に顔を近づけた。

「お前のここから、聖なる水を出させる儀式なんだよ」

「——っ！」

意味を理解した瞬間、顔が真っ赤になった。聖なる水。身体から引き出す。つまり——

「い、嫌です……っ！こんなの儀式じゃ——」

「儀式だよ。千年以上続いている、由緒正しい儀式」

ゼノの手が、私の膝を押し開いた。

「巫女の聖水は、穢れを祓い、大地に恵みをもたらす。——お前の役目だろ」

「でも……っ」

「抵抗するな。神官たちが見てる」

周りを見た。神官たちが、真剣な顔で儀式を見守っている。誰も、これがおかしいとは思っていない。

（——本当に、これが儀式なんだ）

それならば、神に仕える巫女として儀式に参加するしかない。——そう、思うしかなかった。

「あと、一つルールがある」

ゼノが、耳元で囁いた。

「中に指を入れるのは穢れとされてる。だから、舌と外からの刺激だけで聖水を出させる」

「舌……っ」

「お前のおまんこを舐めて、外から押すだけで、聖なる水を出させるんだよ」

「ゼノ」

年配の神官が、低い声で制した。

「巫女様の前だ。言葉を選びなさい」

「——はいはい」

ゼノは肩をすくめたが、反省している様子は微塵もない。むしろ、咎めた神官の方をちらりと見て、口の端だけで笑った。

「じゃあ言い直すよ。——巫女様のお身体に口づけし、外側からの刺激

のみで聖なる水をお導きする。これでいい？」

「……ふざけるな」

「ふざけてなどいません。丁寧に言い直しただけです」

年配の神官が苦い顔をしたが、それ以上は何も言わなかった。——その神官の目も、私の太ももの奥から離れていなかったことに、この時はまだ気づかなかった。

ふいに、またゼノの息が、太ももにかかった。

「たくさん水飲まされたら。——たっぷり出せるようにな」

その言葉で、全てが繋がった。あれは清めの水なんかじゃなかった。

たくさん出せるように、あれだけたっぷりと水を飲まされたんだ。そう思うと、怖気が走った。

(……そんなふうを感じちゃダメよ。これは聖なる儀式なんだから)

「嫌いな奴におまんこ舐められるの、どんな気分だろうな」

ゼノが、にやりと笑った。

「——感じたら負けだからな……巫女様？」

「っ……！こ、こんな状況で感じるわけないでしょう……っ！」

「そう。じゃあ、始めるぞ」

「聖水の儀は、巫女が絶頂することで聖水が解放されます」

年配の神官が、厳かな声で言った。

「巫女様の聖水を全ての神官が授かるまで、儀式は続きます」

周りを見た。神官は三人いる。三人全員が——私を見ていた。

「三回……出すんですか……」

「一人一杯ずつだ。足りなければ、足りるまで出してもらう」

ゼノが、にやりと笑った。

「さあ、始めるぞ」

ゼノの舌が、内腿に触れた。

ペロ♡

「っ……」

声を殺した。周りには神官たちがいる。こんなところで声を出すわけにはいかない。

（それに……こいつに反応してるところなんて、絶対見せたくない……

）

「力入ってる。リラックスしろよ」

「そんなこと、あなたに言われなくてもわかっています……っ」

「相変わらず気が強いな。——ま、そういうところも好きだけど」

「っ……！」

ゼノの舌が、さらに上へ這い上がっていく。太ももの付け根に近づい

ていく。

レロ♡レロ♡

「くっ……」

くすぐりたい。でも、それ以上の何かが、身体の奥で疼き始めている。
(だめ……こんなやつに……反応しちゃ……)

「下着、邪魔だな」

ゼノの指が、下着の端を掴んだ。

「脱がせるぞ」

「っ……」

抵抗できなかつた。するりと下着が下ろされていく。巫女装束の裾はめくられたまま。下半身だけが、神官たちの目に晒される。

——その時、周りの神官たちの視線が一斉に私のそこに集まったのが分かった。真剣な顔。敬虔な表情。……でも、なんだろう。少しだけ、

違和感がある。

(……気のせい、よね。儀式なんだから)

「——やっぱり綺麗だ」

ゼノが、直接そこを見ながら呟いた。

「っ……！ 気持ち悪いこと言わないで……っ」

「そう言うなよ。お前のここ、ずっと見たかったんだから」

ゼノの目が、獣のように光った。

「毎日祈りを捧げてる清らかな巫女様のおまんこが、どんな風に乱れるのか。——見せてもらわないとなあ？」

「み、乱れません……っ！」

「そう。じゃあ、試してみようか」

舌が——直接接触した。割れ目の外側を、下から上へと一舐めされる。

ペロッ♡

「ん……っ♡」

声が漏れそうになって、慌てて唇を噛む。

(だめ……声出しちゃだめ……こいつの舌に反応してるなんて絶対に思われたくない……)

「反応いいな。おまんこ、ぴくって動いたぞ」

「動いてない……っ」

「嘘つけ」

ゼノの舌が、割れ目を下から上へゆっくりとなぞった。さっきより舌の腹を押し付けるようにして、べったりと。

レロ♡レロ♡レロ♡

「ふ……っ♡」

(やだ……なんだか……身体が……)

背筋がぞくぞくしてくる。でも、絶対に声は出さないよう意識を集中

させる。

「巫女様、お顔が赤いですが」

横にいた神官の一人が、心配そうに言った。——そう、心配そうに。でも、そう言いながらもその目が私の露わになった下半身から離れていないことに、私は気づいてしまった。

「だ、大丈夫です……っ」

「聖水の儀式では、快感を覚えることは恥ではありません。むしろ、水神様の祝福です」

「そ、そうなんですか……」

「ええ。存分に感じてください」

(……儀式なんだから。この人たちは神官なんだから。そういう目で見てるわけじゃ——)

「つれない反応だな」

ゼノが、舌を離して言った。こちらを見上げる目が、一瞬だけ何かを訴えるように見えた。——気のせいだろうか。

「もっと鳴かせてやるよ」

舌先が、さっきから敏感になっている箇所に触れた。皮の上から、先端をちよんとつつくように。

チュッ♡チュッ♡♡

「ひっ……♡♡」

身体がびくつと跳ねた。

「やっぱりここだよなあ。巫女様のクリ、皮の中でもう硬くなってきた」

「そんな……っ♡」

「自分でも気付いてんだろ？ ちょっと触っただけでこの反応……」
舌先で、皮越しにクリをくるくると転がされた。

チュル♡チュル♡♡

「んっ……♡んんっ……♡♡」

唇を噛んで、必死に声を殺す。でも、鼻から息が漏れてしまう。

（やだ……こんなやらしい舐め方……感じていいって言われたけど……でも……だめ、やっぱり受け入れちゃだめよ……）

「ゼノ、もっとしつかり刺激しなさい」

年配の神官が、厳かな声で言った。

「了解」

ゼノの舌が、皮をめくってクりに直接吸い付いた。

ヂュウツ♡♡

「ひあっ……♡♡」

ついに声が出てしまった。慌てて口を押さえる。

（だめっ……声出ちゃった……見られてる……みんなに見られながらク

り吸われて……)

「その声。——もつと聞かせろ」

吸いながら、舌尖で転がされる。先端を舐め回しながら、唇で周りごと吸い上げてくる。

チュル♡♡チュルッ♡♡

「んっ♡やだ……っ♡♡」

(やだ……ゼノの舌で……クリ刺激されて……身体が勝手に……)

「我慢しなくていいぞ。儀式なんだから」

「い、ん、ん、やだあ……っ♡♡」

「強情な巫女様だ」

ゼノの舌が、クリから離れた。今度は、入り口の周りをゆっくりと舐め始める。ひだの外側を丁寧になぞるように、左右交互に。

レロ♡レロ♡♡

「っ……っ……♡♡」

(なに……さつきから入り口ばかり……中がジンジンしてきたわ……このまま外ばかりなのかしら……って、私ってば何考えてるの！)

——自身の思考にぞっとした。中に入れてほしい、なんて思っていない。思っていないのに、入り口の周りだけを執拗に舐められていると、何か物足りない感じがする。奥がきゅうつと疼いて堪らない。

「おまんこの穴、ひくひくしてんぞ。奥に入って欲しそうに開いたり閉じたりしてる」

「テキストなこと言わないで……っ♡♡ひくひくなんてしてないわ」

「してるよ。目の前で見てるからな。とろとろのお汁垂らしながら、穴がぱくぱく動いてる」

それを証明しようとしてもいうかののように、入り口を舌先でつつかれた。

チュツ♡♡

「ンっ……♡♡♡」

「残念だな。穢れになるから中には入れられない」

ゼノの声が、意地悪く響いた。

「だから、ずっと外からだけ。おまんこの周り舐め回して、クリ吸って。
——焦れてきてんだろ」

「焦れて……っ♡ない……っ♡♡♡」

舌が、また入り口の周りを這い回る。中に入りそうで入らない。穴の縁をぐるりとなぞって、ひだの一枚一枚を丁寧に舐め分けていく。

レロ♡♡♡ヂュル♡♡♡

「っ♡ンっ♡♡♡」

もう限界だった。外ばかり舐められて、中が空っぽで、おまんこの奥がきゆうきゆうと疼いて止まらない。自分が何を望んでいるのか分かってしまう。分かりたくないのに。

「そろそろ出る頃合いだ」

「え……っ♡♡」

「さっき飲んだ水、全部出してもらうぞ。このおまんこからな」

クリを、舌で強く押された。先端を上から潰すように、舌の腹でぐりつと。

グリッ♡♡

「ひあっ♡やっ♡♡クリ強くしないで……っ♡♡」

「聖なる水、そろそろ出してもらおう」

「む、無理……っ♡♡そんなの……っ♡♡」

「無理じゃない」

舌でクリを押しながら、指で外からおまんこ全体を押された。中には入れない。でも、外側から内壁を押すように、両側のひだごと挟み込むようにして圧をかけてくる。

グリグリッ♡♡ヂュウウッ♡♡

「ンあっ♡やっ♡♡何か……っ♡♡来る……っ♡♡」

(水、いっぱい飲んだせいか、何かが出そうな……)

「いいぞ。その調子。ここからいっぱい潮……じゃなかった、聖水出そうな」

(……潮……?)

ヂュウウッ♡♡グリグリグリッ♡♡

「やっ♡♡やめっ……♡♡無理……っ♡♡何か出ちゃ——っ♡♡」

プシャアッ♡♡

「ひあっ……!!?♡♡」

ビクンビクンッ♡♡

下腹部から、熱いものが噴き出した。止められない。ゼノの顔にかか
るのも構わず、溢れ出ていく。

「ひあっ♡あっ♡♡出てっ……♡♡止まらな……っ♡♡」

プシュッ♡♡プシュッ♡♡

(やだ……なにこれ……さつきゼノが言ってた潮……？こんな男に舐められて……みんなに見られながら……)

目の端が滲んだ。恥ずかしい。恥ずかしすぎて涙が出そうになる。

神官が、器を差し出して受け止めている。私から出た液体が、器にたまっている。

「聖水です……素晴らしい」

年配の神官が、感嘆の声を上げた。

「巫女様の聖水が降りました。水神様に感謝を」

——その器を、神官の一人が受け取った。そして——

「え……っ」

飲んだ。私の目の前で、私から出た液体を、ごくごく飲み干した。

ゴクゴクゴク♡♡

「神の恵みに感謝します」

「っ……！」

顔が熱くなる。私の潮を、飲まれた。聖なる水だと言いながら、私が吹いた潮を。

（私の……飲まれた……恥ずかしい……）

——飲み干した神官の表情を見て、寒気がした。

敬虔な感謝の顔。……のはずだった。でも、喉を鳴らして飲み干した後の、あの一瞬の——舌なめずりは。

（……気のせい。儀式なんだから。神聖なものなんだから……！）

「いい顔してる」

ゼノが、私の顔を覗き込んだ。顎から私の潮が滴っている。それを拭おうともせず——でも、笑ってなかった。いつものにやにや笑いの裏に、

何か別のものが見え隠れしている。

「潮吹いて、それを飲まれて、恥ずかしくてたまらないって顔」

「あ、当たり前でしょ……っ♡♡」

「——ま、あの野郎どもは嬉しくて堪んねえだろうな」

小さな声で付け足された言葉が、耳に引っかけた。

「……え？」

「何でもない。——次だ」

さつき潮を吹いたばかりの中に、ゼノの舌が戻ってきた。

「んっ……♡♡ やっ……♡♡ さつきイったばかり……♡♡」

「分かってる。敏感な内にいっぱい出そうな」

舌がクリに触れた。

チュツ♡♡

「ひあっ♡♡」

さつきより大きく反応してしまう。一回イった後の身体は、全部の感覚が鋭くなっている。

「ほら。すぐ声出る。おまんこもまだひくひくしてる」

「だって……っ♡さつきなので……っ♡♡」

「言い訳すんな。感じてるんだろ」

吸いながら、入り口の周りを舌でなぞられる。中に入りそうで入らない、焦らすような舌遣い。さつきまでと同じはずなのに——身体の反応が、明らかに変わっていた。

チュル♡♡チュル♡♡

「ジっ……♡♡あっ……♡♡」

(……やだ。なんで。嫌いなのに。こんな奴の舌なのに——)

腰が、勝手に浮いた。ゼノの舌に押しつけるように、自分から。

「っ………!♡♡」

気づいて、慌てて腰を下ろす。でも遅かった。

「……今、自分から腰動かしただろ」

「動いてない……っ♡♡」

「嘘つけ。おまんこぐっと押しつけただろ。——俺の舌に、自分から」

「ちが……っ♡♡勝手に身体が……っ♡♡」

「それを『感じてる』って言うんだよ」

ゼノの舌が、さっきまでの丁寧さをかなぐり捨てた。クリから入り口まで、べろべろと舐め回す。唾液とお汁が混ざって、じゆるじゆると下品な音が響く。吸い付いて、舐めて、また吸い付いて——同時に、入り口の周りを指で外から押し込んでくる。

ヂュルルッ♡♡グリグリッ♡♡

「ひあっ♡♡やっ♡♡さっきと全然ちがっ……っ♡♡」

また腰が浮く。今度は止められなかった。ゼノの口に押しつけるよう

に、腰がくねくねと動いてしまう。自分の意思じゃない。身体が勝手に、もつと舐めてほしいと訴えている。

(嘘……やだ……大嫌いなこいつの舌にこんな……自分から押しつけるなんて……っ)

「巫女様……はあ……はあ……お身体が動いていらっしやいますねえ……」

横にいた神官の一人が、息を荒くしながら言った。

「っ……!」

(見られてた……自分から腰振ってるの……全員に……)

恥ずかしさで頭が真っ白になる。でも、その恥ずかしさがなぜか奥をきゆうつと疼かせた。見られている。神官たちに見られながら、大嫌いなゼノの舌に自分から腰を押しつけている。

(おかしい……恥ずかしいのに……見られてると思うと……奥がきゆう

きゆうして……)

「いい反応だな。——恥ずかしいと思うと余計に感じるタイプか」

「ちがっ……♡♡そんなんじゃ……♡♡」

「じゃあなんで、さっきより腰振ってんだよ」

グリグリグググ♡♡♡ヂュウウウ♡♡♡

「あっ♡♡あっ♡♡♡やっ……♡♡♡もお自分で止められないの……♡♡♡」

「止めなくていい。本能に身を任せろよ」

グググ♡♡♡ヂュウウウ♡♡♡

「おっ♡♡♡ジっ♡♡♡やばっ……♡♡♡来るっ……でもっ……自分から腰振りながらイクなんて……♡♡♡」

「ほら、イけ」

「あっ♡♡♡ジっ♡♡♡出るっ……♡♡♡出ちゃ——っ♡♡♡」

プシャアアッ♡♡♡

「ジあつ……!?!♡♡♡♡♡ひあつ♡♡♡あつ♡♡♡♡♡」

ビクンビクンビクン♡♡♡

二回目。腰を自分から突き出した姿勢のまま、潮を吹いた。人生で一番惨めだった。嫌いな男の舌に自分から押しつけて、見られながら潮を吹いて、それでもまだ腰が震えてゼノの口を求めている。

（——私、おかしくなってるんだわ。一回イカされただけで、もう自分の身体が言うときかない……）

涙がこぼれた。恥ずかしいから泣いてるんじゃない。自分の身体が言うことを聞いてくれないことが、怖くて泣いている。

——その時だった。

「——ゼノ、交代しよう」

二人目の神官が、一步前に出てきた。目がぎらついている。はあ……

はあ……と興奮気味に近づいてくる。

「俺にもやらせてくれ。担当じゃなくても、舌で奉仕するのは儀式の範囲内だ」

「……何言ってるんだ」

「巫女様のお身体に触れて聖水を引き出すのは、神官であれば誰だっていいんだ。お前だけがずっと舐めてるのは不公平じゃないか」

——その神官の手が、私の太ももに伸びてきた。

「っ……！」

触られる——と思った瞬間、ゼノの手がその神官の手首を掴んでいた。強く——骨が軋むような音がした。

「触るな」

凍りつくような冷たい声音。いつもの軽い調子が一切ない。殺気すら感じる低さ。

「担当は俺だ。巫女に触れていいのは担当神官だけだ。——千年の伝統だろ」

「し、しかし、そんな伝統はとっくに——」

「しかし何もない。手を引け。——次お前の手がこいつに触れたら、その腕ごと切り落とす」

沈黙が落ちた。神官の顔が青ざめた。ゼノの目が——本気だった。

年配の神官が、咳払いをして割って入った。

「……ゼノの言う通りだ。担当神官以外が巫女に触れるのは禁忌。守りなさい」

神官が、渋々手を引いた。でも、その目は——まだ私の秘部を見ていた。舐めたくてたまらないという目で。

(……この人たちは——本当に神聖な儀式として……?)

ゼノが、私の太ももに手を添えた。さつき神官が触ろうとした場所を、

上書きするように。

「……大丈夫か」

小さな声。私にしか聞こえない声。

「……大丈夫、です……」

「嘘つけ。震えてる」

震えていた。全身が。今、あの神官に触られて、心底気持ち悪いと思
ってしまった。ゼノの手のほうが——まだ、まだと、そう思っ
てしま
った。

（……ゼノは？この人も同じなの？でも……あの神官が手を伸ばして
きた時、止めてくれたのは——）

答えが出る前に、ゼノが口を開いた。私にだけ聞こえるような小声で
囁く。

「……こんなクソ茶番、さっさと終わらせるぞ。あと一人だ」

ゼノの声が、はっきりと変わっていた。もう意地悪も焦らしもない。ただ、早くこの場を終わらせるためだけに動いている。

ゴクゴク♡♡

「神の恵みに感謝します」

二人目の神官が、器を飲み干した。飲み干した後の恍惚とした表情。唇の端についた液体を、舌で舐め取る仕草。——もう気のせいだとは思えなかった。

ふと視線を滑らせると、さつき手を伸ばしてきた神官が自身の股間を手で押さええている姿が見えた。

(この人たち……本当に……)

「——最後だ」

「……これで……おしまい?♡♡」

「ああ。最後の一回だ。これで終わる。——よく耐えたな」

ゼノの声は聞いたことがないくらい優しいものだった。

「それに」

耳元で、囁かれた。

「こんな変態イカレ野郎どもに、お前の潮を飲ませるのもこれで最後だ」

「……え？」

「約束する。——いくぞ」

さっきまでとは舌の動きが違った。焦らしも意地悪もない。的確に、クリの一番敏感な場所を舌先で捉えて、そこだけを集中して刺激してくる。

ヂュルルッ♡♡♡♡

「ひぁっ♡♡♡」